

交 流

7月22日 朝鮮戦争停戦六〇周年 ——ソウルで「歴史と平和」国際会議

朝鮮戦争停戦協定六〇周年をテーマにソウルの慶熙大学で開かれた「歴史と平和についての第五回国際N G O会議」(七月二二〜二五日)という集まりに参加した。開会前日の参院選での極右自民党圧勝が重苦しい影を投げかけていた。韓国の発言者の多くが日本の教科書、慰安婦、靖国問題に言及して、安倍政権下日本の暴走への批判と警戒の声を挙げていた。極右政権は日本だけの問題ではなく、アジアにとつての問題なのだ。

が囁んでいることもあって、参加することにした。半官半民、左右雑居、参加者に研究者が多く、政府関係者も目立つなど、構成は雑多。だがアジア共通の歴史認識の形成のための歴史教育を追求してきたという。青年プログラムも組み込まれ、日本からの参加者のなかには日韓共通授業のための中学の歴史の先生の姿も見えた。国際会議の参加者はアジア、欧米含めて五〇名ほど。

朝鮮戦争の戦火が一応終息してから六〇年、戦争状態は継続し、米朝間に平和条約は結ばれず、冷戦構造が居座り、北朝鮮が核武装するという異常な状態をいかに解体し、南北朝鮮の和解と東アジアの平和をもたらずのか。このテーマは切実なものだ。日本における安倍極右政権の成立はそれに逆行する動きだ。

会議の冒頭に武者小路公秀さんが基調報告に立った。重厚にかつ軽妙な語り口で、東アジアの現状を世界的展望に位置づけるもので、参加者はずつしり受け止められたと感じられた。それに続く全体会議「停戦六〇年と南北融和・東アジアの平和」では、金大中政権の閣僚として対北・対米折衝に当たったセ・ユンジョン元統一相の生々しい報告が圧巻だった。二〇〇〇年、金正日は米国に、平和条約と引き換えに、核放棄だけでなく、南での米軍駐留も認めると確言したが、クリントンの米国はそのチャンスを見逃したと彼は言った。私もこのセッシヨンのパネリストの一人として発言し、「戦争状態の終結」＝米朝平和条約への政治意志が核問題・南北問題を含む東アジア問題解決への近道だと主張した。討論全体として米国の役割への言及が少なかつたという印象をもった。

この間、再建途上のA R E N Aのメンバーは何回か集



交流

8月8日
原発現地と結んで
8月9日
再稼働を阻止
するか
8・8討論集会

七月二一日、安倍政権は原発再稼働を公約に掲げて参議院選挙に「勝利」した。ところが七月一八日に原子力規制委員会は東電から「海洋汚染」の報告を受けていたという。にも関わらず、この事実が発表されたのは投票日の翌日である。このようなゴマカ

まつて意見を交換し、来年ARENNA総会を開く見通しを検討した。見通しは暗くも明るくもないと感じた。

(ピープルズ・プラン研究所
運営委員／武藤一羊)

しの中で原発をこの国からなくすために、今どのような運動が必要なのだろうか。

再稼働阻止全国ネットワーク主催の、「原発現地と結んでどう再稼働を阻止するか8・8討論集会」がスペースたんぼぼで行われた。八月二四・二五日の再稼働阻止全国討論会へ向けた重要な取り組みである。

最初に山崎久隆さんから「海洋汚染問題を中心に福一の現状と問題点」についての報告があった。今や汚染水問題は国際問題となっている。汚染水の流失を山崎さんは「事件」と表現し、それは東電によって仕組まれたものだと言う。国が資金を出さざるをえない危機的な状況をつくりだしたのである。膨大な資金を要する汚染水対策をあえて疎かにし、ここまで事態を悪化させてしまうのである。

東電の利益だけをどこまでも追求する姿勢は柏崎刈羽原発の再稼働へと向かう。さらに話は技術的な細部に及んだが、福島第一原発が現状のままですご大な地震が起きれば、構内は汚染水で液状化し、原発作業すらできなくなるという恐ろしい話であった。「東電は解体しておくべきだった」と山崎さんは強く批判された。

次に「規制委員会の動向と課題」を木村雅英さん、「防災と原発立地・周辺の闘い」が布施哲也さん、「原発現地の活動」について柳田真さん、「今後の行動に向けて」が岩下雅裕さんから問題提起された。原子力規制委員会は「再稼働推進組織」であること。立地自治体と周辺自治体との格差の問題。そして原発現地行動で行った風船上げは、目に見えない放射能の動きを可視化するもので、短時間で拡

散するその恐怖が語られていく。会場からは、再稼働優先の適合性審査は中止すべき、汚染水問題で廃炉作業ができない状況など様々な意見が出され、原発事故の深刻な問題が次々と浮かび上がった。

東京ではいったい何ができるのか。現地の人々とのような繋がりを作れるのか、何度もそんな「問い」を噛みしめさせられるとても内容のある会だった。

(福島原発事故緊急会議／鰐沢桃子)

交流

6月25日 沖繩・高江の座り込み
裁判と映画『標的の村』
上映開始

六月の後半に慰霊の日にまたがる形で沖繩・高江に行ってきた。去年のオスプレイ配備直後の一〇月に高江の座り込みに参加し、北部訓練場メインゲートすぐのヘリパッドにオスプレイが離着陸をしている光景を見てから、八か月のぶりの来沖になる。六月の二九日には座り込み六周年集会有るといふのに参加できない日取りではあったが、座り込み運動を萎縮させるための「通行妨害」SLAPP裁判の控訴審の結果を、住民や支援の人たちと一緒にききたいと思つての旅だった。

高江についた日はヤンバルの森昆虫ツアーで貴重な生物の宝庫を実感。次の日は沖繩慰霊の日。一日座り込みをし、

その翌々日の二五日に那覇高裁で控訴審判決の日をあとという間に迎えた。判決は「控訴棄却」。説明もなく退廷しようとした裁判長を、住民や支援者たちは引き止め、理由を説明させようとしたが、逃げるように退出したとのことだった。防衛局側の訴えを全面的に認めるその判決内容に住民たちは怒りを隠せない様子で、外で知らせを聞いた住民の中には泣き出す方もいた。その数日後、上告を申し入れ、これからは東京で裁判が続くことになった。訴えられた伊佐真次さんいわく、「これは平和活動をしている人たちへの挑戦だ。全国から来ている皆さんはぜひこのことを広めてほしい」。

東京では伊佐さんを支えるために有志で「STOP SLAPP—高江」というグループが立ち上がった (<https://>

www.facebook.com/groups/198877243604526/)。また、八月一〇日からポレポレ東中野(東京・東中野)にて、この高江の座り込みと去年のオスプレイ普天間配備の現場に密着取材したQ&A B(琉球朝日放送)のドキュメンタリー映画『標的の村』の公開が始まり、連日満席であるようだ。しかしながら、東京で高江の座り込みを支援しているグループ・ゆんたく高江のメンバーからの現地からの報告によると、現場には座り込み支援者が圧倒的に足りず、座り込みテントは満席にはなっていないという。連日作業員があの手この手でヘリ・オスプレイパッドの工事現場に入り、作業を進めている。米軍ヘリが墜落事故を起こしたのがつい先週のこと、というのにオスプレイの追加配備もあつげなくされてしま

(事務局／星植恵)

<http://www.hyoteki.com/>